J.G.FRAZER

THE GOLDEN BOUGH
A STUDY IN MAGIC AND RELIGION

完訳

金枝篇

全8巻＋別巻1

呪術と宗教の研究

J・G・フレイザー

神成利男❖訳　石塚正英❖監修

祭司はなぜ「黄金の枝」を折り取り、前任者を殺すのか——
イタリアの静かな湖畔から、全世界の慣習、儀式、風俗をめぐり、
呪術と宗教の起源をさぐる壮大な旅が、今始まる。

国書刊行会

ジェイムズ・ジョージ・フレイザー
James George Frazer

イギリスの人類学者、民俗学者、古典学者。
一八五四年、スコットランド、グラスゴーの裕福な家庭に生まれる。
グラスゴー大学を卒業後、ケンブリッジのトリニティ・カレッジに進み、民俗学、神話学を修める。
一八七九年同カレッジのフェロー、一九〇七年にはリバプール大学の教授となり、
イギリス最初の社会人類学の講座を担当する。
学者としての名声を高めた『金枝篇』の他、
『サイキス・タスク』（一九〇九年）、『トーテミズムと族外婚』（一九一〇年）、
『旧約聖書のフォークロア』（一九一八年）など現代人類学に多大な影響を与えた著作のほか、
パウサニアスなどのギリシア、ラテンの古典の翻訳、考証学研究にも力を注いだ。一九四一年死去。

J.G.FRAZER, THE GOLDEN BOUGH: A STUDY IN MAGIC AND RELIGION

完訳 **金枝篇** 呪術と宗教の研究

全8巻＋別巻1

特色

❖「決定版」と言われる一九三六年刊の第三版全十三巻の本邦初の完訳。
❖「簡約版」（邦訳＝岩波文庫）では割愛された膨大な原註もすべて収録。著者が典拠とした引用資料を明記。註の中でしか語られない例証も収載。
❖各巻の内容に対応する「余論」各章を巻末に収録。
❖「簡約版」で削除された数々の章、節、エピソードが収載され、フレイザーの思考の流れがより明瞭に。
❖ヨーロッパをはじめ、アジア、アフリカ、オーストラリア、アメリカまで、全世界の慣習、風俗に関して言及。
❖各巻に索引、別巻で総索引を付す。

体裁……菊判・上製函入　二段組　各巻平均600頁
予価……各巻10000円
2003年9月刊行開始

国書刊行会
〒一七四—〇〇五六　東京都板橋区志村一—十三—十五　Tel. 03(5970)7421　Fax. 03(5970)7427　e-mail: info@kokusho.co.jp　http://www.kokusho.co.jp

取扱い書店

申込書：
『完訳❖金枝篇——呪術と宗教の研究』
全8巻＋別巻1　予価各巻10000円＋税

注文数	ご氏名
セット	

ご住所
〒

TEL

国書刊行会
〒174-0056
東京都板橋区志村1-13-15
Tel. 03(5970)7421
Fax. 03(5970)7427

刊行の言葉

『金枝篇』の著者ジェイムズ・ジョージ・フレイザー(James George Frazer, 1854-1941)は、スコットランドに生まれ、グラスゴー大学とケンブリッジ大学に学び、トリニティ・カレッジのフェローとなり、一九〇七年にはリヴァプール大学に教授として迎えられます。その間彼は、イギリス人類学の父と称えられるE・B・タイラーの著作に接したことで、本格的に人類学や民俗学、宗教学、神話学を研究し、その成果が『金枝篇』として結実します。

『金枝篇』の原著は、一八九〇年に二巻本の初版、一九〇〇年に三巻本の第二版、そして一九一一～一五年にかけて全十二巻になる第三版が刊行され、一九三六年には第三版に余論が加わり全十三巻の大作となりました。また著者自身がより広範な読者に向けて、大幅に資料を割愛し編集した「簡約版」が一九二二年に出版されています。わが国における翻訳でよく知られている岩波文庫版『金枝篇』全五巻はこの「簡約版」の翻訳で、また二巻本の初版の翻訳もちくま学芸文庫より出版されています。

翻訳者の神成利男氏は、一九一七年秋田県に生まれ、一九七〇年、アイヌの里として知られる二風谷に定住しました。アイヌ文化の研究を通じて金田一京助氏と交友があり、自らはイザベラ・バード著『日本の知られざる辺境』の北海道編を「コタン探訪記」として、一九七七年に翻訳出版しています。一九六〇年代後半から『金枝篇』第三版の翻訳を始め、一九九一年に死去する直前に、翻訳を完成させました。その後、一九九二年五月、雑誌『状況と主体』(谷沢書房)第一九七号より同翻訳の連載が開始し、全七部中第四部の連載途中に同誌の廃刊を迎えました。今回の完訳版は神成氏の遺稿を元に、東京電機大学教授の石塚正英氏の監修を受け、出版の運びとなりました。

フィールド・ワークに基づかないフレイザーの研究は、批判の対象にもなりました。しかし二十世紀の人類学、民俗学、宗教学のみならず、T・S・エリオットの詩作をはじめ、このフレイザー畢生の書がもたらした影響は計り知れません。意義深い研究書としてだけでなく、「黄金の枝」をめぐる壮大な物語、「祭司殺し」の謎を解くミステリーとしても楽しめるこの書の新しい魅力が多くの読者の方に伝わることを願ってやみません。

二〇〇三年五月

国書刊行会

待望の全訳を座右に備えたい

作家・評論家 **紀田順一郎**

文化人類学の古典『金枝篇』の価値については、いまさら述べるまでもないが、原本は十三巻もある浩瀚なもので、読破には容易ではない。それが鏤骨の全訳で読めるというのは、まさに朗報といってよい。

従来の邦訳は、簡約版のテキストによるものであったが、現在私たちがこの古典に魅力を覚えるのは、何といっても世界中から集められた神話、習慣、呪術などのエンサイクロペディアともいうべき豊富な資料性にあるのだから、全訳でなければ意義が薄いことになる。それはわが国の南方熊楠の場合と同様の網羅性と意外性、知的驚異に充ち満ちており、人類の知的発展や歴史的多様性、あるいは可能性に対する限りない考察のヒントを与えてくれるだろう。

本書を通読したり、座右に備えて活用したいと思っていた人は多いはずである。碩学の生涯を費やした訳業により、いま私たちは『金枝篇』という名著の真面目にふれることができる。心から推薦したい。

わくわくするほど面白い文学書

駒沢大学文学部教授 **富士川義之**

大著『金枝篇』の初版が刊行されてからちょうど百年目にあたる一九九〇年に、現代イギリスの知識人の多くは、枕頭の書として、ギボンの『ローマ帝国衰亡史』よりも『金枝篇』のほうを好むというアンケート調査の結果が報じられた。つまりギボンの大著と同じく、『金枝篇』も人類学の名著としてよりもむしろ文学の古典として読まれる機会が多いことが明らかにされたのである。

これはフレイザー自身の希望に添う読み方であると言ってよい。なぜなら、『金枝篇』の執筆にあたり、彼が第一に心がけたのが、より広範な読者層に読まれ理解されるような研究書を書くことにあったからだ。言いかえれば、フレイザーは人類学が文学の一分野でもあることを再認識させるような、そういう研究書を書く意図をもっていたのである。

奇怪な祭司殺しの物語の謎を解明することが、人間のものの考え方の起源を探ることにつながる、そんな基本プロットをもつ『金枝篇』はいま読んでも古びていないし、わくわくするほど面白い文学書である。

ロマンの香りをたたえる古典

国際日本文化研究センター所長 **山折哲雄**

二十世紀の世界の人文学にもっとも豊かな栄養を与え、はてしなき好奇心を刺激してやまなかった書物を一冊だけ挙げよ、と言われれば、私はためらうことなくJ・G・フレイザーの『金枝篇』を挙げる。なぜならこの作品の出現によって、人類学や民俗学の領域はもとより、歴史、文学、哲学などの諸分野にわたる研究者たちは、その世界観と人間認識の座標軸を百八十度回転させることになったからである。

『金枝篇』の全編は、知識と情報の収集において群を抜く。固有のテーマの抽出とその拡充展開において、他の追随を許さない。さらに『金枝篇』の叙述の主旋律はロマンの香りをたたえ、その想像力の奔放な飛翔において叙事詩的学問大系の名に恥じないと言っていい。こうして『金枝篇』は、二十世紀におけるまたとない古典の地位を獲得したのである。

そのフレイザー畢生の大作をのこりなく完訳された神成利男氏の粘りづよいお仕事には、心底脱帽せざるをえないのである。

二十一世紀への集大成

文化人類学者 **山口昌男**

第二次世界大戦のはじまる直前、昭和十四年ごろ、フレイザーの『金枝篇』の売れ行きは日本が一番だったそうである。折口信夫が丁寧に全巻を読み、その他英文学の研究者がエリオットの「荒地」を解読すべく『金枝篇』を読んでいた。コンラッドの『闇の奥』にこの書物の影を認めた人は多かった。第二次大戦後、アメリカの作家ソール・ベローの『雨の王ヘンダソン』の中にその直截的な影響を見た人は多い。

ところが不思議なことに、日本からこの作品に対する反応とも云うべきものは少なかったように思われる。その理由の一つは、九巻にわたるこの大著がフレイザー自身による一巻の簡約本で、すまされていたという不思議な現象に帰されるのではなかろうか。

今回、徹底した註入りによる原本の訳出は、若い研究者を誘ってそれらの研究グループをして、本書に収められる事実の蒐集、分類など、二十一世紀に向かって開かれる研究分野の意味を明らかにせしめうるものと思われるのである。

J.G.フレイザー

金枝篇

呪術と宗教の研究——目次

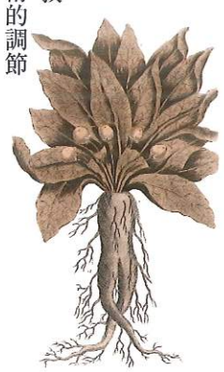
J.G.FRAZER
THE GOLDEN BOUGH: A STUDY IN MAGIC AND RELIGION

第1巻 第1部 呪術と王の起源

THE MAGIC ART AND THE EVOLUTION OF KINGS

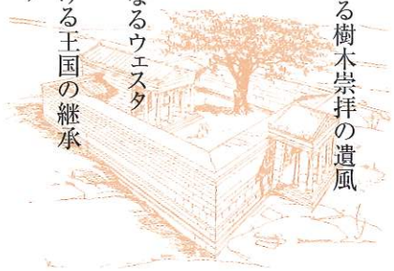
VOL.1

1 森の王
2 祭司王
3 共感呪術
4 呪術と宗教
5 天候の呪術的調節
6 王としての呪術師
7 人間に化身した神



VOL.2

8 自然各部門の王
9 樹木崇拝
10 現代ヨーロッパにおける樹木崇拝の遺風
11 植物への性の影響
12 聖なる結婚
13 ローマとアルバの王
14 王の火
15 火鑽り
16 父なるユピテルと母なるウェスタ
17 永遠の火の起源
18 古代ラティウムにおける王国の継承
19 聖ジョージとパリリア
20 樫の樹の崇拝
21 ディアヌスとディアナ



第2巻 第2部 タブーと霊魂の危機

TABOO AND THE PERILS OF THE SOUL

1 王の負担
2 霊魂の危機
3 タブーとされる行為
4 タブーとされる人々
5 タブーとされる事物
6 タブーとされる言葉
7 野生人に対する我々の債務

Note
人や物の上をまたぐべからず

第3巻 第3部 死にゆく神

THE DYING GOD

1 神々の死
2 神である王殺し
3 伝説における王殺し
4 王の供給
5 一時的な王
6 王の息子の犠牲
7 霊魂の継承
8 樹霊の殺害

Note
A 中国人の死に対する無関心
B 呪術祭儀としてのブランコ

第4巻 第4部 アドニス、アッティス、オシリス

ADONIS ATTIS OSIRIS

アドニス

BOOK FIRST ADONIS

1 アドニスの神話
2 シリアのアドニス
3 キプロスのアドニス
4 聖なる男女
5 メルカルトの焚焼
6 サンダンの焚焼
7 サルダナパルスとヘラクレス
8 火山の信仰
9 アドニスの祭儀
10 アドニスの園

アッティス

BOOK SECOND ATTIS

1 アッティスの神話と祭儀
2 植物の神としてのアッティス
3 父なる神としてのアッティス
4 アッティスの人間化身
5 吊された神
6 西洋における東洋の宗教
7 ヒュアキントス

オシリス

BOOK THIRD OSIRIS

1 オシリスの神話
2 公式エジプト暦
3 エジプト農民の暦
4 オシリスの公式祭典
5 オシリスの性格
6 イシス
7 オシリスと太陽
8 オシリスと月
9 月に関する共感の教義
10 オシリスとしての王
11 オシリスの起源
12 母系制と母性女神

Note
1 王モロク
2 寡夫の神官
3 都市を守る呪術
4 ペレウ諸島民のいくつかの慣習

第5巻 第5部 穀物と野獣の霊

SPIRITS OF THE CORN AND OF THE WILD

VOL.1

1 ディオニュソス
2 デメテルとペルセポネ
3 原初的農耕における競技の呪術的意義
4 原初的農業における女性の役割
5 北欧における母なる穀物母と穀物の乙女
6 他の国々における母なる穀物母
7 リテュエルセス
8 動物としての穀霊

Note
原初の暦におけるプレアデス

VOL.2

9 動物としての古代植物神
10 神を食べること
11 新穀供犠
12 肉食に関する類感呪術
13 神である動物を殺すこと
14 狩人による野獣への贖罪
15 農民達による害獣への贖罪
16 人間霊魂の動物への移転
17 動物聖餐の類型

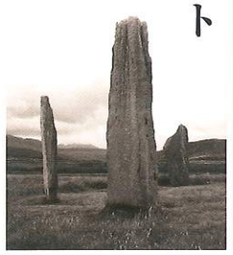
Note
ガロ人の米収穫時における馬の祭儀

第6巻 第6部 スケープゴート

THE SCAPEGOAT

1 災厄の移し換え
2 悪魔の遍在
3 災厄の公式追放
4 公式のスケープゴート
5 一般のスケープゴート
6 古代ギリシア・ローマにおける人間のスケープゴート
7 メキシコにおける神殺し
8 サトゥルナリア祭と同系祭典

Note
キリストの磔刑



第7巻 第7部 麗しのバルドル

BALDER THE BEAUTIFUL

VOL.1

1 天と地の間
2 思春期の少女の隔離
3 バルドルの神話
4 ヨーロッパの火祭
5 火祭の解釈

VOL.2

6 他の国々における火祭
7 火中で人間を焼くこと
8 夏至前後の魔法の花
9 バルドルとヤドリギ
10 民話における外魂
11 民俗慣習における外魂
12 金枝
13 ネミよさらば

Note
1 蛇石
2 魔女の猫への変身
3 アフリカのバルドル
4 ヤドリギと金枝

別巻

参考文献・通巻総索引